

話題開始部で用いられる質問表現

—日本語母語話者同士および母語話者／ 非母語話者による会話をもとに

中井 陽子

キーワード

質問表現・母語話者・非母語話者・話題開始部・会話展開の型

1. はじめに

日本語学習者達が日本人と人間関係を構築して行く際、初対面の出会いという場面は避けられない。その初対面の出会いという登竜門をいかに通り抜け、次のより良い人間関係につなげていくかは、なかなか容易なことではないであろう。せっかく出会いがあり、初対面の相手に興味を抱いても、それをうまく示していなければ、初対面だけで終わってしまう場合もある。例えば、日本語非母語話者が初対面の母語話者について質問していき、せっかくお互いの共通点を見つけても、その話題に対して言語的にうまく興味を示せず、母語話者に何か物足りない気持ちを抱かせ、落胆させてしまうことがある。または、非母語話者が自分の話はそれなりにできるが、相手の母語話者について興味を示し、うまく質問して聞いていけず、母語話者を寂しい気持ちにしてしまう場合もある (cf. Kato [Nakai] 1999、中井 2002、Nakai 2002)。したがって、会話相手や話題への興味を示し、より良い人間関係を構築していくためには、いかに会話に積極的に参加しながら話題を開始し、終了していけるかという談話能力が必要であると言える。

Kato [Nakai] (1999) では、このような点を考慮に入れ、母語話者同士と母語話者／非母語話者が日本語会話をする際、話題開始部及び終了部においてそれぞれがどのような言語的要素をどのぐらいの割合でどのように用いるのかについて比較分析した。本研究は、Kato [Nakai] (1999) で行った総合的研究の一部である質問表現に焦点をあて、初対面の日本語母語話者同士、母語話者／非母語話者間による8つの会話のケーススタディーとして、質問表現によって、話題がどのように開始されていくのかを分析するものである。分析は以下の4点から行う。

研究課題

1. 話題開始部で用いられる質問表現の頻度によって、どのような会話展開の型に分類できるか

2. 質問表現でどのような話題を開始しているか
3. 話題開始部で用いられる質問表現にはどのような種類のものがあるか
4. 他の言語的要素とどのように共起しているか

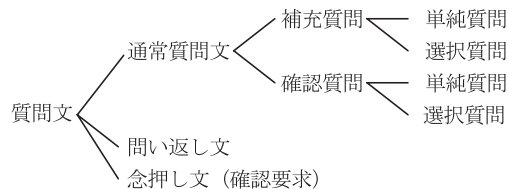
2. 先行研究

南（1985）は、「質問文」の範囲を以下の三つの条件をみたすものと定義している。

- a. 相手がいることを前提とした言語表現であること。一般的にいて、言語表現はかならずなんらかの相手にむかって発せられるものとはかぎらない。いわゆるひとりごとはもちろんそうだが、アツとかアイタツとかといった感情・感覚の直接的表現も相手なしの場合が多い。それに対して、ここでいう質問文は相手の存在を必要とする。
- b. その相手に対して、なんらかの問題を提示し、それについての情報の供給を要求する言語表現であること。
- c. その要求に応じた、相手からの情報の供給に関するなんらかの表現が考えられるものであること、つまり、質問の表現と応答の表現のセットを考えることが可能なものであること。ただし、応答の表現は言語表現であっても、なんらかの非言語的手段による表現であってもかまわない。また、現実には応答の表現がいつも実現するとはかぎらないし、実現しても質問者が要求する内容のものではないこともありうる（まとはずれ、はぐらかしなど）。

（南 1985: 39）

そして、南（1985）では、以下のように、質問文として「通常質問文」「問い返し文」「念押し文（確認要求／tag-question）」の3つの言語表現を分析している。



「通常質問文」は、情報取得の仕方によって、「補充質問（Wh-question）」と「確認質問（Yes-no question）」に、たずね方によって「単純質問」と「選択質問」に分けられ、以下の4つの組み合わせが考えられるとし、その例を挙げてている¹。

- a. 補充質問 単純質問：例) ドコデ休ムノ？／コレハナンデスカ？
- b. 補充質問 選択質問：例) ドチラヲ差上ゲマスカ？／ドレニシヨウカ。
- c. 確認質問 単純質問：例) 展覧会ニ行キマスカ？／雪ハフリソウ？
- d. 確認質問 選択質問：例) 君行ク？、行カナイ？／雪ハフリソウ？、フリソウジヤナイ？

さらに、斎藤（1989:41）は、宮地（1980）を基に、質問表現を形式的要素によって定

義しており、「文末に特定の助詞『か』を添える」「文中に疑問詞を用いる」「文末の音調をあげる」「終助詞『な』『ね』を文末に追加して確認要求を表す」「『かしら』『かな(あ)』を文末に添える」の5つの形式的要素のうち1つ以上持つものを質問表現であるとしている。

次に、会話展開の型の研究は、宇佐美・嶺田(1995)と佐々木(1998)を参考にした。宇佐美・嶺田(1995:141-142)は、初対面の日本語会話の話題開始部で用いられる質問形式と叙述形式の分析で、話題展開のパターンを「質問—応答型」と「相互話題導入型」の2タイプに分けている。「質問—応答型」とは、参加者の一人が質問形式で話題を導入し、それに対してその会話相手が返答をするという型であるとしている。例えば、参加者Aが参加者Bに対し、「シカゴで日本語を教えていたんですか。」と質問し、参加者Bがそれに対して答え、さらに、その答えを受けて参加者Aが参加者Bに対して、「どのレベルだったんですか。」と聞き、参加者Bがそれに答えるという型だとしている。一方、「相互話題導入型」とは、参加者同士が互いに話題を導入し合うものであり、参加者の一人が話題を導入すると、その会話相手がそれに返答して次にそれに関連した新しい話題を導入していくという型であるとしている。例えば、参加者Aが参加者Bに対し、「こちらにはいついらしたんですか。」と質問し、参加者Bがそれに対して答え、さらに、参加者Bが参加者Aに対して、「そちらは長いんですか。」と聞き返し、参加者Aがそれに答えるという型だとしている。また、佐々木(1998)は、参加者の一方がもう一方の参加者に「事実の情報」「意見や感想」を質問していく「インタビュースタイル」と、話題についてお互いの意見を述べ合う「話し合いスタイル」があるとしている。ここでいう「事実の情報」とは「相手や話題に関する事実の情報の要求」のことを言い、例えば、「お名前は?何年生ですか?」等の質問文を指し、「意見や感想」とは「相手の意見や感想の要求」のことを言い、例えば、「日本の印象はどうですか?」等の質問文を指す(佐々木1998:115-116)。

また、話題の種類は、三牧(1993)を参考にした。三牧(1993)は、大学生間による初対面の会話を分析し、以下のような8話題カテゴリーと23話題項目からなる話題選択肢リストをまとめている。

話題カテゴリー	話題項目
1. 大学生活:	授業、サークル活動、キャンパス、バイト、休みの日、遊び
2. 所属:	学部、学科、サークル、学年
3. 居住:	自宅/下宿、通学、現在居住地
4. 共通点:	共通の知人、共通体験
5. 出身:	出身地、出身校
6. 専門:	研究テーマ、卒論、修論、専攻
7. 進路:	就職、進学
8. 受験:	受験、塾

(三牧1993:51)

3. 質問表現の分析方法

質問表現の定義

本稿では、南（1985）の「質問文」の範囲の三つの条件をみたすものを質問表現とする。さらに、形式的質問表現の定義は、斎藤（1989）を参考に、文末イントネーションについての定義も追加し、以下の8つの形式的要素のうち、1つ以上持つものを質問表現とする。この8つの形式的要素のうち、4、5、8は、斎藤（1989）の形式的質問表現の定義に新たに追加したものである。

1. 「～か？」（発話＋終助詞「か」＋上昇イントネーション）
例) 61T：エミリーさんは3年生ですか？ [会話5]
2. 「～ね？」「～な？」（発話＋終助詞「ね」「な」＋上昇イントネーション）
例) 186D：あー、(1.2) うー、日本、日本で生まれましたね？ [会話7]
3. 「～かしら」「～かな（あ）」
（発話＋終助詞「～かしら」「～かな（あ）」＋下降イントネーション）
例) 行くかしら。／行くかなあ。
4. 「～でしょう／だろう？」（発話＋「でしょう」＋上昇イントネーション）
例) 375T：時々こう聞きたくなるでしょう？ [会話5]
5. 疑問詞＋「でしょう／だろう。」＋下降イントネーション
例) 475J：うん、これ何だろ。 [会話3]
6. 文中に疑問詞を用いる 例) 86J：え、ここにはいつまでいるの？ [会話3]
7. 文末上昇イントネーション
例) 510Y：英語の先生っていうのは、じゃあ、あの一、中学校？ [会話2]
8. 言い差しの文で、文末が平坦なイントネーション
例) 195J：じゃ、今は一、有給で一、 [会話3]

会話資料

本稿で分析した会話資料は、初対面の20～30代の二人の話者による15分間の会話（母語話者間のものが3会話と母語話者／非母語話者間のものが5会話）を、米国某大学において録画撮りしたものである。撮影当時、母語話者（仮名：富士男、小夜、八重、彩子、次郎、美砂、俊、隼人）と非母語話者（仮名：ナット、エミリー、リサ、ダニー、ベン）の参加者は、米国某大学の大学生または大学院生であった。母語話者の啓二は、アメリカ旅行中の日本の会社員であった。母語話者の美砂と俊は、それぞれ米国某大学のティーチングアシスタント（TA）として日本語の1、2年生の授業を2年間担当していた。なお、非母語話者の第一言語はいずれも英語であり、撮影当時、全員が同じ米国某大学の日本語クラスの三年生（授業時間500時間以上）であった。また、ダニー以外はみな、日本滞在経験があった。【表1】に参加者の属性をまとめた。

会話撮影当日は、録画用の部屋の中で参加者2人だけで自由に会話をしてもらい、15分後に筆者が参加者のうちの一人の名前を呼んだら、その参加者が適当に会話をまとめて終わるように指示しておいた。いずれの会話も小型マイクとテーブルマイクを用いて録音・録画し²、すべて文字化した³。さらに、録画直後、または、その三日以内に、全参加

【表1】 会話参加者の属性

	参加者 (仮名)	母語	出身地	性別	年齢	職業/学年	米国滞在期間/ 日本語学習歴
会話1	富士男 (F)	日本語	愛知県	男性	21 歳	大学 3 年	米国滞在:3 年
	小夜 (S)	日本語	大阪府	女性	28 歳	修士課程 日本語 TA	米国滞在:5 年
会話2	八重 (Y)	日本語	神奈川県	女性	32 歳	大学 4 年	米国滞在:2 年半
	彩子 (A)	日本語	千葉県	女性	27 歳	大学 3 年	米国滞在:3 ヶ月
会話3	啓二 (K)	日本語	北海道	男性	25 歳	日本の会社員	米国滞在:1 ヶ月旅行
	次郎 (J)	日本語	東京都/ 米国ミネソタ州	男性	27 歳	修士課程	0-3 歳:滞在 4-24 歳:毎夏滞在 米国留学:5 年
会話4	美沙 (M)	日本語	大阪府	女性	28 歳	修士課程 日本語 TA	米国滞在:7 年
	ナット(N)	英語	米国ミネソタ州	男性	24 歳	大学 4 年	米国高校日本語:3 年 日本留学:1 年半 日本ホームステイ:3 ヶ月 米国大学日本語:1 年
会話5	峻 (T)	日本語	北海道	男性	35 歳	修士課程 日本語 TA	米国滞在:5 年
	エミリー(E)	英語	米国ミネソタ州	女性	21 歳	大学 3 年	交換留学:3 ヶ月 米国大学日本語:2 年半
会話6	八重 (Y)	日本語	神奈川県	女性	30 歳	大学 4 年	米国滞在:2 年半
	リサ (L)	英語	米国 ウスコンシン州	女性	23 歳	大学 4 年	東京滞在:2 年間 米国大学日本語:3 年
会話7	隼人 (H)	日本語	東京都	男性	25 歳	大学 4 年	米国滞在:2 年半
	ダニー(D)	英語	米国ミネソタ州	男性	29 歳	大学 4 年	米国大学日本語:3 年
会話8	啓二 (K)	日本語	北海道	男性	25 歳	日本の会社員	米国滞在:1 ヶ月旅行
	ベン (B)	英語	米国ミネソタ州	男性	23 歳	大学 4 年	交換留学:1 年間 米国大学日本語:2 年

者に対し、参加した会話について聞くフォローアップ・インタビュー（参加者一人につき約1時間、計16時間）を行った⁴。

話題区分調査

話題の切れ目の判断には、延べ40人に対して行った話題区分調査と鈴木（1995）による「内容区分」の基準を参考にした。話題区分調査では、8会話それぞれに対し、その会話に参加していない日本語母語話者を5人集め、録画した会話を2度見て、話題⁵の区切れ目と話題のタイトルを決めてもらった。その後、被調査者が指摘した話題区分の一致した数と、話題タイトルの類似性を考慮に入れ、それぞれの話題区分と話題タイトルを決定した。但し、鈴木は被調査者5人のうち、4、5人の指摘が一致した区分を主に分析しているが、本研究では、3人以上が一致したものを無条件に話題区分に含めた⁶。

4. 分析結果

4.1 質問表現の使用率／会話展開の型

本研究では、話題区分調査で区切られた話題開始部の第一発話目に用いられている質問表現のみを分析対象とし、第二発話目以降に用いられている質問表現の繰り返し、言い換えは分析対象外とした。

【表2】に、参加者が質問表現で話題を開始した割合（回数／全話題数）と会話展開の型についてまとめた。表中の2.にはそれぞれの会話で母語話者と非母語話者がどのような割合で質問表現を用いて話題を開始したかを示した。例えば、【会話1】の母語話者の富士男は、全11話題中2話題（18%）を質問表現で開始したことになる。また、1会話中、質問表現を用いて話題を開始した割合が著しく多い方の参加者にハイライトを付けた。

【表2】質問表現で話題を開始した割合／会話展開の型

	1.全話題数	2.質問表現による話題開始率 (参加者別)		3.質問表現による 話題開始率(参加者合計)	4.会話展開の型
会話1 (NS-NS)	11	富士男 (F) 2/11 (18%)	小夜 (S) 3/11 (27%)	5/11 (45%)	情報提供話題開始型
会話2 (NS-NS)	28	八重 (Y) 7/28 (25%)	彩子 (A) 3/28 (11%)	10/28 (36%)	情報提供話題開始型
会話3 (NS-NS)	23	啓二 (K) 8/23 (35%)	次郎 (J) 8/23 (35%)	16/23 (70%)	質問—応答型 (相互型)
会話4 (NS-NNS)	16	美沙(M) TA 12/16 (75%)	ナット(N) 0/16 (0%)	12/16 (75%)	質問—応答型 (一方方向型)
会話5 (NS-NNS)	20	峻(T) TA 10/20 (50%)	エミリー(E) 3/20 (15%)	13/20 (65%)	質問—応答型 (一方方向型)
会話6 (NS-NNS)	17	八重(Y) 6/17 (35%)	リサ(L) 8/17 (47%)	14/17 (82%)	質問—応答型 (相互型)
会話7 (NS-NNS)	12	隼人(H) 3/12 (25%)	ダニー(D) 6/12 (50%)	9/12 (75%)	質問—応答型 (一方方向型)
会話8 (NS-NNS)	22	啓二(K) 6/22 (27%)	ベン(B) 4/22 (18%)	10/22 (45%)	情報提供話題開始型

4. の会話展開の型では、3. の質問表現による話題開始率の参加者合計が50%以下の場合は、質問表現ではなく、情報提供によって話題が開始されている傾向があるため、「情報提供話題開始型」(cf.「話し合いスタイル」佐々木1998)とした。そして、50%以上の場合は、情報提供より質問表現で話題が開始されている傾向があるため、「質問／応答型」(宇佐美・嶺田1995)とした。また、「質問／応答型」は、参加者同士が同程度に質問表現で話題を開始している場合の「相互型」と、参加者のどちらかがもう一方の参加者よりも著しく質問表現で話題を開始している場合の「一方方向型」(cf.「インタビュースタイル」佐々木1998)に分けた。【表2】から分かるように、本研究の母語話者同士の会話では、自らの情報を提供して話題を膨らませていく「情報提供話題開始型」(2/3)と双方の

情報を要求していく「相互型の質問—応答型」(1/3)が見られた。それに対し、母語話者／非母語話者の会話では、いずれの型も見られたが、「質問／応答型」(4/5)が多く見られ、特に、母語話者が非母語話者に積極的に質問表現を用いて話題を開始していく「一方方向型の質問／応答型」(2/5)が見られた。

宇佐美・嶺田(1995)によると、「質問—応答型」は目上対目下の会話に、「相互話題導入型」は同性・同等などによる弾んだ会話に多く見られたという。さらに、初対面の会話では、質問形式で話題導入されることが多く、特に目上が話題を導入して会話を進めたいという傾向があるとしている。また、母語話者／非母語話者による日本語会話の接触場面の分析を行った俣野(1996:104)によると、「接触場面性に対する意識」が強い場合、母語話者は非母語話者をサポートし、非母語話者は母語話者にサポートされる「ゲスト・ホストという役割分担の期待が生じる」としている。さらに、佐々木(1998)の分析でも、異文化間コミュニケーションの場面で、母語話者が非母語話者に質問していく「インタビュー・スタイル」をとる傾向がみられ、母語話者同士では、お互いの意見を述べ合う「話し合いスタイル」をとる傾向が見られたとしている。これは、異文化圏の非母語話者の発話行動は、母語話者同士の場合より予測しにくいいため、「インタビュースタイル」により共有認識の少ない相手から情報を引き出し共通点を見つけ、安心感を得ようとするからだという。また、母語話者は、「インタビュースタイル」で非母語話者について質問していくことで、非母語話者に発話の機会を与え、会話に参加しやすくしている傾向があるとしている。

本研究で分析した会話でも、母語話者／非母語話者による【会話4】【会話5】では、母語話者が質問表現を多く用いて話題を開始する「一方方向型の質問／応答型」が見られた。これは、母語話者の美沙(28歳)と峻(35歳)が、会話相手のナット(24歳)とエミリー(21歳)より年上であることに加え、日本語ティーチングアシスタント(TA)であるため接触場面に対する意識が日頃から高いので、会話相手の非母語話者について質問表現を用いて話題を開始し、非母語話者を積極的に会話に参加しやすくしようとしていたのではないと思われる。また、非母語話者もそれを受けて質問されたことに答えることによって会話に参加していこうという意識が高くなり、「一方方向型の質問／応答型」になったのではないかと考えられる。

一方、【会話7】では、非母語話者のダニーが母語話者の隼人に対して、質問表現で積極的に話題を開始している傾向が見られた。これは、ダニー(29歳)の方が隼人(25歳)よりも4歳年上であり、「目上」「目下」の意識がダニーと隼人の間に多少なりともあったからではないと思われる。フォローアップ・インタビューにおいて、隼人は、ダニーは隼人より年下のアメリカ人大学生達よりも落ち着いていて大人だったと語っていた。このことから、少なくとも隼人はダニーを年齢的に「目下」とは見えていないことが伺える。また、ダニーは隼人の年齢については何も述べていなかったが、隼人がどのような人なのか大変興味があり、いろいろ質問してみたかと答えていた。

ただし、【会話4】【会話5】【会話7】以外の会話では、目上の参加者の方が質問表現を若干多く用いて話題を開始している会話もあったが、どれもそれほど大差はなかった。これは、これらの会話では、参加者同士で年齢差があまり顕著に意識されず、同年代として初対面の会話が行われたためではないと思われる。また、母語話者／非母語話者の会話

【会話6】【会話8】でも、母語話者の八重と啓二は日頃あまり非母語話者と日本語で会話をしたことがなく、日本語ティーチングアシスタントの美沙と峻ほど、接触場面への意識が高くなかったため、「一方方向型の質問／応答型」にならなかったのではないかと思われる。

4.2 話題分類

三牧（1993）の話題選択肢リストを追加修正したものを基に、話題開始部において質問表現によってどのような話題が開始されていたかを分類し、多いもの順に【表3】にまとめた。なお、（ ）内の数字は話題数を表す。

【表3】 話題開始部において質問表現によって開始された話題

	話題カテゴリー	話題項目
母語話者同士	居住 (9) 出身(5) 大学生生活(5) 個人の歴史(4) 所属(3) 名前(2) 社会(1) 生活(1) 目前物(1)	現在居住地での活動(2) 現在居住地の気候(2) 現在居住地の就職活動(1) 現在居住地の滞在経験(1) 現在居住地の滞在期間(2) 現在居住地の滞在理由(1) 出身地の方言(1) 授業(3) 専攻(1) 日本帰省(1) 過去の仕事(2) これまでの経緯(2) 就職先(1) 大学名(2) 日本の近況(1) 趣味(1) テーブルマイク(1)
母語話者 (非母語話者との会話)	大学生生活(18) 留学生生活(10) 共通点(3) 所属(2) 進路(2) 出身(1) 生活(1)	英会話学校(1) 休暇(1) 今日の活動(1) 授業(2) 授業－日本語(4) 授業－日本語オフィス(1) 授業－担当講師(1) 専攻(2) ボーイフレンド(1) 趣味(1) 日本旅行予定(3) 遊び(1) 学校(1) 経験(3) 留学先システム(1) 授業(1) 場所(1) ホストファミリー(1) 旅行(1) 共通の知人(1) 国際的カップル(1) 日本の焼き物(1) 学年(2) 就職(2) 出身地(1) 趣味(1)
非母語話者 (母語話者との会話)	居住(6) 出身(3) 大学生生活(3) 家族(2) 生活(2) 名前(2) 個人の歴史(1) 所属(1) その他(1)	現在居住地滞在理由(1) 現在居住地(2) 現在居住地滞在期間(3) 出身地(3) アルバイト(1) 趣味(1) 専攻(1) 勤務時間(1) 勤務期間(1) 出身校(1) 大学名(1) 会話終了の切り出し(1)

【表3】から分かるように、話題開始部で用いられていた質問表現では、母語話者同士では居住、出身、大学生生活、個人の歴史についての話題が、非母語話者と会話した母語話

者では大学生生活、留学生活についての話題が、非母語話者では居住、出身、大学生生活についての話題が多く見られた。初対面の場では、やはり、相手がどのような人物であるかを知るために、相手の出身、生活、歴史について質問するようである。また、お互いが今、共通して住んでいる居住地、つまり、本研究のデータでは、参加者が共に住んでいるM州の話題を出すことにより、「私達のM州」という共通認識を高め、心理的に近づこうとしているのではないだろうか。また、アメリカにいる日本語母語話者が日本語学習者である非母語話者に、話題作りのために「日本」「日本語」「日本留学」について、質問表現で話題を開始しているのも、国籍は違ってもお互い同じ「日本」「日本語」という「知識・体験・場」を共有しているという認識を深めて近づこうとしているからではないかと思われる。さらに、本研究のデータでは、母語話者が非母語話者に居住、出身についてはあまり聞いていないが、これは、会話した場所がM州であり、非母語話者がM州の地元の者だと予測できるため、あえて、居住、出身について質問して話題を開始しなかったためではないかと思われる。

4.3 質問表現の種類

【表4-1】【表4-2】【表4-3】と【表5】⁷に話題開始部で用いられていた質問表現の種類別頻度についてまとめた。南（1985）の「質問文」の分類では、いずれの会話でも、「単純質問」（「補充質問」「確認質問」）が多く見られ、「選択質問」「問い返し文」「念押し文」はほとんど見られなかった。また、非母語話者と会話した母語話者の質問表現には、「確認質問の単純質問」が特に多く見られた（64.9%）。例えば、「31K:日本、日本には行ったことあるんですか?」「339M:うー、関西の方には行かなかったんですか?」「61T:エミリーさんは3年生ですか?」などがそれにあたる。

英会話分析を行ったLong（1981:135）では、母語話者は「補充質問（Wh-question）」「確認質問（Yes-no question）」「念押し文（確認要求／tag-question）」を多く使い、非母語話者が会話の内容をコントロールしやすいようにし、会話への参加を促すという努力をすると述べている。本研究のデータでも、日本語母語話者が「確認質問（Yes-no question）」を多く用いて話題を開始したのは、非母語話者が質問表現に簡単に答えられることによって、会話へ参加しやすくするように配慮したからではないかと考えられる。

【表4-1】 話題開始部で用いられていた質問表現（母話者同士）

	母話者同士 (会話 1、2、3)	質問の話題 カテゴリー	南 (1985)				共起する言語的要素								
			補充質問 単純質問	確認質問 単純質問	確認質問 選択質問	問い返し	念押し	接続表現	指示表現	「は」「のだ」文	倒置				
7F: あの一、お名前は？		名前	1							1					
352F: あ、あの、友達から聞いたんですけどー、		出身 (出身地の方言)		1									1		
353F: 関西の方で、ニュースも関西でやるんですか？		出身 (出身地の方言)		1									1		
24S: こちらの学生さんですか？		所属 (大学名)	1											1	
77S: 日本はどちらですか？		出身 (出身地)	1												1
103S: どちらですか？愛知県は、		出身 (出身地)	1												1
12A: こちらの学生さんでいらっしゃるんですか？		所属 (大学名)	1												1
58A: 戸井田さんは、どんな感じなんですか？		個人の歴史 (これまでの経緯)	1												1
55A: あれ？日本では、なにのお仕事をやっていらっしゃったんですか？ところで、		個人の歴史 (過去の仕事)	1												1
140Y: えっと一、愛さんです、		名前						1							
212Y: レンテーションってお分りですか？		大学生活 (授業)		1											
271Y: あ、じゃ、何のクラス取ってるんですか？		大学生活 (授業)	1												1
429Y: あっ、じゃあ、ESLのクラスは、あれですか？あの一、えーっと一、ESLの授業を實際聴講されたりとかしてるんですか？		大学生活 (授業)		1										1	
510Y: 英語の先生っていうのは、じゃあ、あの一、中学//校？		個人の歴史 (過去の仕事)		1											1
715Y: この冬知ってますか？出身は、		居住 (現在居住地の気候)		1											1
779Y: どちらですか？出身は、		出身 (出身地)	1												1
18F: え、アメリカ初めてですか？		居住 (現在居住地の滞在経緯)		1											1
86F: え、ここにはいつまでいるの？		居住 (現在居住地の滞在期間)	1												1
99F: 今、何、してるんですか？		所属 (就職先)	1												1
195F: じゃ、今は、有給でー、		居住 (現在居住地の滞在理由)		1											1
302F: 最近日本は一、どう？		社会 (日本の近況)	1												1
475F: うん、これ何だろ、		目的物 (テールバイク)	1												1
512F: えっ、ここに来て一、(1.5) 今までどこに行ったの？		居住 (現在居住地での活動)	1												1
583F: あ、運動一、するの？		生活 (趣味)		1											1
33K: もうずっとくんくらい、の寒さ？		居住 (現在居住地の気候)		1											1
41K: カヌー、今日連れて行くてくれるんでしょ？		居住 (現在居住地での活動)		1											1
122K: 今、ここにきて何年ぐらいい？		居住 (現在居住地の滞在期間)	1												1
144K: じゃー、日本、日本では一、大学とか一、出てから？		個人の歴史 (これまでの経緯)		1											1
172K: 今、どんな一、		大学生活 (専攻)	1												1
174K: 専攻、		大学生活 (専攻)	1												1
286K: こっつて、日本みたいな就職活動みたいなっつていうのは一、ないんですか？		居住 (現在居住地の就職活動)		1											1
325K: 毎年、年何回とか帰ってるんですか？		大学生活 (日本滞省)		1											1
329K: どこですか？日本、		出身 (出身地)	1												1
TOTAL			15	0	14	0	0	0	0	2	4	8	18	13	4
%			48.4%	0.0%	45.2%	0.0%	0.0%	6.5%	0.0%	12.9%	25.8%	58.1%	41.9%	41.9%	12.9%

【表4-3】話題開始部で用いられていた質問表現（非母語話者）

	非母語話者 (会話4、5、6、7、8)	質問の話題 カテゴリ	南 (1985)				共起する言語的要素								
			補充質問 単純質問	補充質問 選択質問	確認質問 単純質問	確認質問 選択質問	繰り返し 問い返し	接続表現	指示表現	「は」「のだ」文	倒置				
8B: 中、川さんですか？		名前					1								
111B: あの、日本のどこから来ましたか？		出身 (出身地)	1												
178B: もう、(1.5)あー、(1.10)3年間仕事をしていますか？		生活 (勤務期間)			1										
225B: だからー、あのー、毎日何時から何時まで仕事をしていますか？		生活 (勤務時間)	1						1						
35D: あ、あー、ミネソタ大学でー、あー、勉強しますか？		所属 (大学名)			1										
93D: あー、どれぐらい、あー、アム、どれぐらい、アメリカにー、		居住 (現在居住地滞在期間)	1												
110D: うーん、うーん、あー、あー、この辺は、		居住 (現在居住地)	1												
126D: あー、ブレイナーという所を、あー、知っていますか？		出身 (出身地)			1										
186D: あー、(1.2)うー、日本、日本で生まれませんでしたね？		出身 (出身地)							1						
236D: あーん、あ、よくスキーしますね？		大学生活 (趣味)													
264E: あー、あー、専門は、何ですか？		大学生活 (専攻)	1												
539E: あー、(1.8)どのぐらいアメリカに？		居住 (現在居住地滞在期間)	1												
581E: あのー、あーん、家族は、		家族	1												
6L: お名前は何？		名前	1												
96L: あ、いつ、アメリカに来ましたか？		居住 (現在居住地滞在期間)	1												
136L: よく、あのー、ミネソタはー、あー、好きですか？		居住 (現在居住地)			1										
271L: アルバイトが、ありますか？していますか？		大学生活 (アルバイト)			1										
351L: あのー、日本にはー、あの、大、大学へ行きまししたか？		個人の歴史 (出身校)													
370L: どうして、アメリカに？ あー、来ましたか？		居住 (現在居住地滞在理由)	1												
510L: 家族、兄弟？		家族													
565L: あのー、(3.0) nice to meet you、日本語では？		その他 (会話終了の切り出し)	1		1										
			11	0	7	0	0	0	1	2	1	1	8	0	0
			52.4%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	4.8%	9.5%	4.8%	4.8%	38.1%	0.0%	0.0%	0.0%
			TOTAL 21												
			%												

【表5】話題開始部で用いられていた質問表現の種類別頻度（南 1985「質問文」分類）

	補充質問 単純質問	補充質問 選択質問	確認質問 単純質問	確認質問 選択質問	問い返し	念押し	質問表現 総数
母語話者同士	15 48.4%	0 0.0%	14 45.2%	0 0.0%	0 0.0%	2 6.5%	31 100%
母語話者 (非母語話者と の会話)	12 32.4%	0 0.0%	24 64.9%	1 2.7%	0 0.0%	0 0.0%	37 100%
非母語話者	11 52.4%	0 0.0%	7 33.3%	0 0.0%	1 4.8%	2 9.5%	21 100%

4.4 共起する言語的要素

【表6】に、話題開始部の質問表現と共に用いられていた言語的要素の頻度をまとめた⁸⁾。ここから分かるように、母語話者と比べて、非母語話者は、質問表現と共に、接続表現、指示表現、提題表現「は」、「のだ」文、倒置をほとんど用いていなかった。

【表6】話題開始部で用いられていた質問表現と共に起する言語的要素の頻度

	接続表現	指示表現	提題表現「は」	「のだ」文	倒置	質問表現 総数
母語話者同士	4 12.9%	8 25.8%	18 58.1%	13 41.9%	4 12.9%	31
母語話者 (非母語話者と の会話)	6 16.2%	1 2.7%	22 59.5%	16 43.2%	3 8.1%	37
非母語話者	1 4.8%	1 4.8%	8 38.1%	0 0.0%	0 0.0%	21

5. データ分析

母語話者同士と非母語話者の会話の話題開始部で用いられていた質問表現で、「出身—出身地」と「所属—大学名」について話題にしている例を比べてみる。まず、話し相手の「出身—出身地」について聞く質問表現では、【表7】から分かるように、母語話者同士の会話では、「どちらですか？出身は。」等のように、「補充質問 単純質問」で、指示表現

【表7】話題開始部で用いられていた質問表現（出身—出身地について）

	話題開始部で用いられた質問表現	話題	質問表現の種類	共起する言語的要素
母語話者同士	77S: 日本はどちらですか？	出身	補充質問 単純質問	指示表現（ど系）「は」
	103S: どちらですか？愛知県は。	出身	補充質問 単純質問	指示表現（ど系）「は」倒置
	779Y: どちらですか？出身は。	出身	補充質問 単純質問	指示表現（ど系）「は」倒置
	329K: どこですか？日本。	出身	補充質問 単純質問	指示表現（ど系）倒置
非母語話者	186D: あー、(1.2) うー、日本、日本で生まれましたね？	出身	念押し文	終助詞「ね？」
	111B: あの、日本のどこから来ましたか？	出身	補充質問 単純質問	指示表現（ど系）

(ど系) 提題表現「は」、倒置、が用いられている。しかし、非母語話者ダニー (D) の場合、「あー、(1.2) うー、日本、日本で生まれましたね?」では、そのいずれの言語的要素も共に用いられていないことが分かる。さらに、この質問表現は、終助詞「ね?」が用いられ、「念押し文」になっている。この発話に対して、会話相手の母語話者隼人 (H) もフォローアップインタビューで「違和感を持った」と語っており、少し、押し付けがましい印象になってしまっている。また、非母語話者ベン (B) が用いた「あの、日本のどこから来ましたか?」という質問表現は、話題開始部の一発話目に用いられており、英語の “Which part of Japan are you from?” の直訳ではないかと思われる。

また、「所属—大学名」についての質問表現では、【表8】から分かるように、母語話者同士では「こちらの学生さんでいらっしゃるんですか?」のように、「確認質問 単純質問」で、指示詞 (こ系)、「のだ」文が用いられている。それに対し、非母語話者は、「あ、あー、M 大学でー、あー、勉強しますか?」のように、そのいずれの言語的要素も用いられていない。

【表8】 話題開始部で用いられていた質問表現 (所属—大学名について)

	話題開始部で用いられた質問表現	話題	質問表現の種類	言語的要素
母語話者同士	24S: こちらの学生さんですか?	所属	確認質問 単純質問	指示表現 (こ系)
	12A: こちらの学生さんでいらっしゃるんですか?	所属	確認質問 単純質問	指示表現 (こ系)「のだ」文
非母語話者	35D: あ、あー、M 大学でー、あー、勉強しますか?	所属	確認質問 単純質問	

一般に、眼前指示の指示表現では、話し手と聞き手が向き合っている状態では、話し手の縄張りのものには「こ系」を、聞き手の縄張りのものには「そ系」を用いる。また、話し手と聞き手が並んで同じ方向を向き、「私達」という縄張りを形成すると、この縄張りの中のものには「こ系」を、その外にあるものには「あ系」を使うとされている (安藤 1986、日向・日比谷 1988)。よって、「M 大学」という固有名詞より、「こちら」を使って所属を質問した方が、「今ここに共にいる私たちが共有している縄張り」の中にある大学に所属しているのかどうかを質問することになり、より親近感、共有感が初対面でも作り出せるのではないかと考えられる。

5. まとめと課題

以上、日本語母語話者同士、母語話者/非母語話者の会話において、話題開始部で用いられていた質問表現について見てきた。その結果、次のことが分かった。

1. 話題開始部で用いられる質問表現の頻度によって、どのような会話展開の型に分類できるか

母語話者同士の会話では、20～30代という同年代の意識が高かったのか、目上/目下の間に起こる「質問—応答型」ではなく、「情報提供話題開始型」と「相互型の質問—応答型」が見られた。さらに、母語話者/非母語話者の会話では、「質問/応答型」、特に「一方方向型」が多く見られた。これは、接触場面で、共有認識の少な

い非母語話者から情報を引き出し共通点を見つけると共に、非母語話者が積極的に会話に参加しやすくするために、非母語話者について積極的に質問していきという母語話者の意識と、その意識を受け入れて質問に答えることによって会話に参加していきという非母語話者の意識が高かったからではないかと思われる。

2. 質問表現でどのような話題を開始しているか

母語話者同士では居住、出身、大学生生活、個人の歴史についての話題が、非母語話者と会話した母語話者では大学生生活、留学生活についての話題が、非母語話者では居住、出身、大学生生活についての話題が多く見られた。母語話者と非母語話者の会話では、日本、日本語、日本留学など、お互いに共通する「日本」についての話題が多く出ていた。

3. 話題開始部で用いられる質問表現にはどのような種類のものがあるか

いずれの会話にも「補充質問 単純質問」「確認質問 単純質問」が多く見られた。また、非母語話者と会話した母語話者の質問表現には、「確認質問の単純質問」が多くあり、単純に答えられる質問表現を用いる傾向が見られ、非母語話者の会話への参加を容易にしようとする配慮が見られた。

4. 他の言語的要素とどのように共起しているか

母語話者と比べて、非母語話者は、質問表現と共に、接続表現、指示表現、提題表現「は」、「のだ」文、倒置をほとんど用いていなかった。このことにより、押し付けがましい発話、英語の直訳的な発話、または、親近感・共有感を示しにくい発話になっていた。

以上の4つの分析結果から共通して分かることは、初対面の会話では、参加者間で、お互いがどのような人物であるのかを知り、その中でお互いに共通して持っているものは何であるかを探していくために、質問表現が話題開始部で用いられているということである。特に、非母語話者との接触場面への意識の高い母語話者は、単純に答えられるような質問表現を多く用いて会話相手の非母語話者についての話題を開始していくことにより、非母語話者が会話に参加しやすくしようとしていた。中井(2002)では、このような母語話者からの質問表現に答えていくだけで受身的に会話に参加していく非母語話者の方が、会話全体に対する理解が高いということが観察された。また、一方、非母語話者が積極的に自ら母語話者について質問して話題を開始していくというケースも見られ、こちらの非母語話者の方が会話に対する理解は低いものの、会話相手や録画した会話ビデオを見た第三者から「積極的で親しみやすい」という良い印象を持たれていた。日本語教育の現場でも、学習者が初対面の人に良い印象を与え、お互いの共通点を見つけ、それを深めることにより、新しい人間関係を構築していく可能性を広げる会話力の養成に力を入れるべきであると考えられる。そのためには、学習者自身がいつまでも「一方方向型の質問—応答型」で受身的に質問されたことだけに応答しているのではなく、ある時は自分自身から積極的に相手のことを質問していく「一方方向型の質問—応答型」や「相互型の質問—応答型」で、または、話題に対して自分の情報を積極的に提供していく「情報提供話題開始型」で話せる練習もしていった方がいいと思われる。そして、今現在お互いが共にいる場所について「こ系」の指示表現等を用いることによって、初対面の人とも今ここで共に存在している

「私達」ということを暗示的に表し、親近感・共有感をより伝えていけるような練習も必要であると考えられる。

最後に、本研究で得られた結果は、アメリカで初めて出会った日本語母語話者と非母語話者による8会話だけの分析を基にしたものであるので、一般化するには制約があると言える。今後、より多くの会話データを分析し、会話全体の質問表現の分布と、さらなる会話展開の型、話題の種類、質問表現の種類・機能や他の言語的要素との共起の仕方などの特徴を調査していきたいと思う。さらに、「質問一応答」パターンの相互作用的分析も今後の課題としたい。また、初対面の会話が全体的にどのような相互作用のもとに行われていくのかという広い視野からの分析によって、日本語教育につなげられるようにしていきたいと思う。

謝 辞

本稿は、1999年5月提出の修士論文、“Topic shifting devices used in Japanese native/native and native/non-native conversations”の一部を和訳改訂し、2002年7月の早稲田大学国語学会（現在、日本語学会と改名）で発表したものを修正したものである。執筆に当たり、米国ミネソタ大学 ポリー・ザトラウスキー準教授に御指導頂いた。深く感謝申し上げます。さらに、本研究で使用した会話の参加者、話題区分調査の被調査者の方々、早稲田大学国語学会発表の際に、貴重なご意見をいただきました方々にもここに感謝の意を表させていただきます。

注

- 1 詳しくは、南（1985）を参照。
- 2 詳細は、中井（印刷中）を参照。
- 3 会話例の文字化表記は、ザトラウスキー（1993）を参考に以下のような方法で行った。

。	下降イントネーション
、	ごく短い沈黙、あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句、副詞、従属節」等の後に記す。
?	上昇イントネーション
—	母音の引き延ばし
(1.5)	一秒以上の沈黙秒数（ストップウォッチで測ったもの）

- 4 詳しくは、Kato [Nakai]（1999）、中井（2002）を参照。
- 5 被調査者には「話題（トピック、内容のまとめ）」と説明した。
- 6 詳しくは、Kato [Nakai]（1999）、中井（印刷中）を参照。
- 7 質問表現の種類別頻度（%）の求め方は、それぞれの質問表現の種類別の使用数を質問表現の使用総数で割ったものである。例えば、母語話者同士の会話では、質問表現の総数が31であり、そのうち、「補充質問 単純質問」が15個用いられていたため、使用頻度（%）は、15/31で48.4%となる。したがって、それぞれの質問表現の種類別頻度を合計すると100%になる。
- 8 共起する言語的要素の頻度（%）の求め方は、それぞれの言語的要素の使用数を質問表現の使用数の総数で割ったものである。例えば、母語話者同士の会話では、質問表現の総数が31であり、そのうち、接続表現が4個共に用いられていたため、質問表現と共起した接続表現の頻度（%）は、4/31で12.9%となる。ただし、表中のそれぞれの言語的要素（接続表現、指示表現、提題表現「は」、「のだ」文、倒置）は、1つの質問表現に複数共起する場合があるので、それぞれの頻度の合計は100%にはならない。

- ° ただし、「日本から来たんですか。」という質問表現をした後に、「日本のどこですか。」とさらに質問する場合であれば、さほど違和感がないと思われる。

参考文献

- 安藤貞雄 (1986) 「第9章 ダイクシスの比較」『英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究』 pp. 212-241 大修館書店
- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章概説』教育出版
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二人間の会話分析より」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2号 pp. 130-145.
- 斎藤里美 (1989) 「日本語教育における疑問文・質問文—コミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題」『日本語学』8月号 pp. 41-56.
- 佐久間まゆみ (1987) 「文段認定の一基準 (I) —提題表現の統括」『文藝言語研究言語編』11号 pp.89-135 筑波大学文芸・言語学系紀要
- 佐々木由美 (1998) 「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話—同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12号 pp. 110-127.
- ザトラウスキー、ポリー (1986a, 1986b, 1987) 「談話の分析と教授法 I, II, III—勧誘表現を中心に」『日本語学』5巻11号 pp.27-41, 5巻12号 pp. 99-108, 6巻1号 pp. 78-87.
- _____ (1991) 「会話分析における単位について—『話段』の提案」『日本語学』10巻10号 pp. 79-96.
- _____ (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- _____ (1998) 「初対面の会話における話題を作り上げる言語・非言語行動の分析」社会言語科学会第二回研究発表大会七月 予稿集
- 鈴木香子 (1994) 「対話資料における話段の考察」日本女子大学修士論文
- _____ (1995) 「内容区分調査による「話段」認定の試み」『国文目白』34号 pp.76-84. 日本女子大学国語国文学会編
- 中井陽子 (2000) 「母語話者同士及び母語話者／非母語話者による日本語会話の話題転換部に使われる要素—情報提供者の場合」韓国日本学会と日本語教育学会共催第20回国際シンポジウム予稿集 pp.158-165.
- _____ (2001) 「母語話者間による日本語会話の話題転換部に使われる要素」第7回社会言語科学会研究発表大会 予稿集 pp.101-106.
- _____ (2002) 「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる質問表現と会話の理解・印象の関係—フォローアップインタビューをもとに」『群馬大学留学生センター紀要』2号 pp. 23-38.
- _____ (印刷中) 「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16号
- 日向茂男・日比谷潤子 (1988) 「第4章 結束性の問題」『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 談話の構造』 pp. 55-105 荒竹出版
- 俣野夕子 (1996) 「接触場面における話者交代」『阪大日本語研究』8号 pp. 87-106.
- 南不二男 (1972) 「日常会話の構造—とくにその単位について」『言語』1巻2号 pp. 108-115. 大修館書店
- _____ (1983) 「談話の単位」『日本語教育指導参考書—談話の教育と研究 I』 pp.91-112. 国立国語研究所 大蔵省印刷局
- _____ (1983) 「第2章 質問文の構造」『朝倉日本語新講座4 文法と意味 II』水谷静夫編 pp.39-74 朝倉書店
- _____ (1993) 「述語文の輪郭」『現代日本語文法の輪郭』 pp.40-62. 大修館書店
- 三牧陽子 (1993) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析」『日本語教育』103号 pp. 49-58.

宮地裕 (1980) 「質問表現」『国語学大辞典』 p. 217.

Kato [Nakai], Yoko (1999) Topic shifting devices used in Japanese native/native and native/non-native conversations. University of Minnesota: MA thesis.

Long, Michael (1981) Questions in foreigner talk discourse. *Language learning*, 31: 1 pp. 135-157.

Nakai, Yoko Kato (2002) Topic shifting devices used by supporting participants in native/native and native/non-native Japanese conversations. *Japanese Language and Literature*, 36: 1: 1-25.